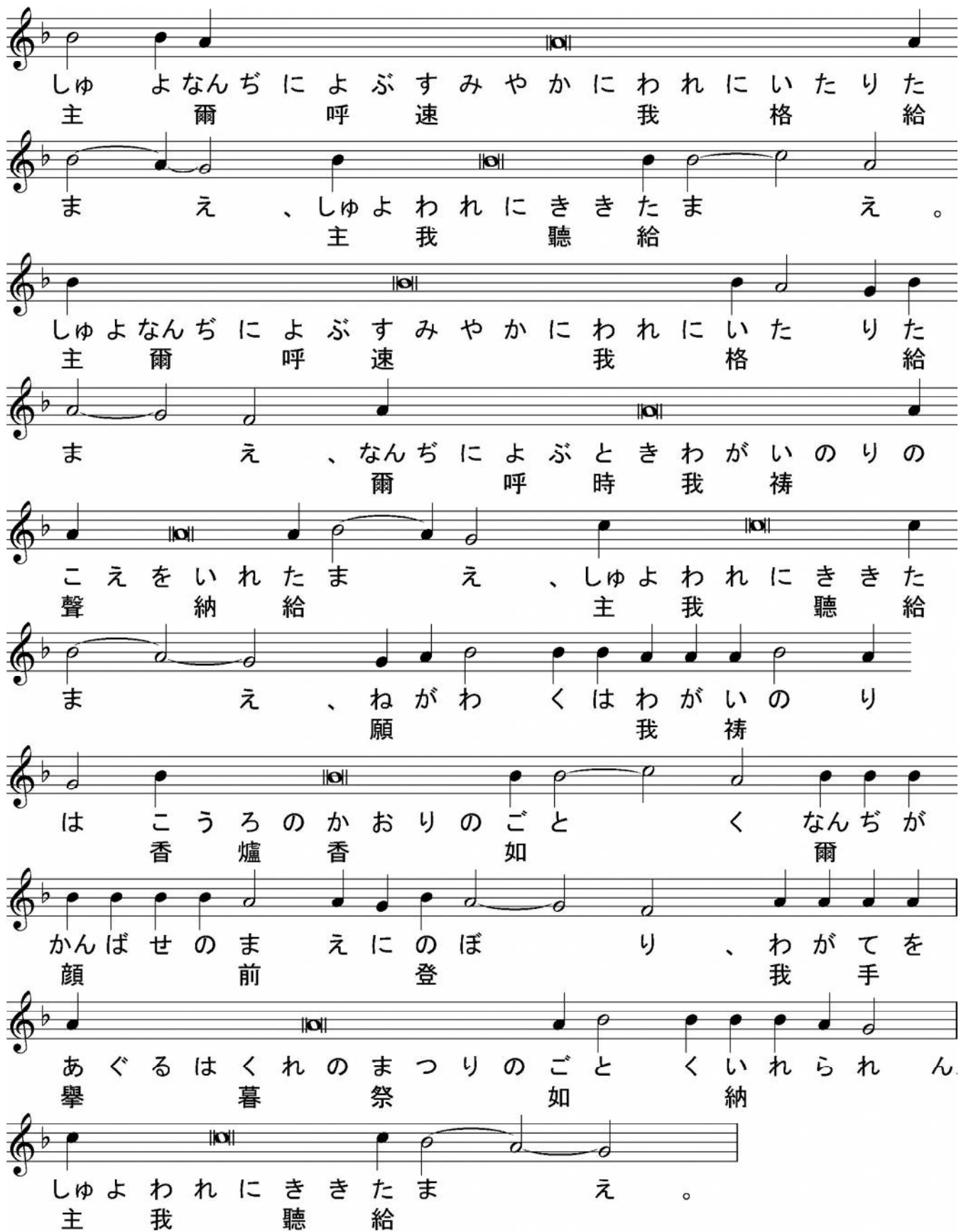


【 第 140 聖詠 第 8 調 】



しゅよなんぢによぶすみやかにわれにいたりた給  
主 爾 呼 速 我 格 給

まえ、しゅよわれにききたまえ。  
主 我 聽 給

しゅよなんぢによぶすみやかにわれにいたりた給  
主 爾 呼 速 我 格 給

まえ、なんぢによぶときわがいのりの  
主 爾 呼 時 我 禱

こえをいれたまえ、しゅよわれにききた給  
聲 納 給 主 我 聽 給

まえ、ねがわくはわがいのり  
願 我 禱

はこうろのかおりのごとくなんぢが  
香 爐 の 香 如 爾

かんばせのまえにのぼり、わがてを  
顔 前 登 我 手

あぐるはくれのまつりのごとくいれられん  
舉 暮 祭 如 納

しゅよわれにききたまえ。  
主 我 聽 給

誦經) しゅ わ くち まもり お わ くちびる もん ふせ たま わ こころ よこしま ことば  
主よ、我が口に 衛を置き、我が 唇の門を扞ぎ給え、我が心に 邪なる言

かたぶ ふほう おこな ひと とも つみ いいわけ なか ねが われ かれら  
に傾きて、不法を行 う人と共に、罪の推 諉せしむる母れ、願わくは我は彼等の

あまみ な ぎじん われ ばつ こ きょうじゆつ われ せ こ い うるわ  
甘味を嘗めざらん。義人は我を罰すべし、是れ 矜 恤 なり、我を譴むべし、是れ極と 美

あぶら わ こうべ なや あた もの ただわ いのり かれら あくじ てき かれら  
しき膏、我が首を悩ます能わざる者なり、唯我が禱は彼等の悪事に敵す。彼等

しゅちよう いわお あいだ さん わ ことば にゆうわ き われら つち ごと き くた  
の首長は巖石の間に散じ、我が言の柔和なるを聴く。我等を土の如く斫り砕き、

わ ほね ぢごく くち ち お しゅ しゅ ただわ め なんぢ あお われなんぢ たの  
我が骨は地獄の口に散りて落つ。主よ、主よ、唯我が目は爾を仰ぎ、我爾を恃む、

わ たましい しりぞ なか わ ため もう わな ふほうしゃ あみ われ まも たま  
我が霊を退くる母れ。我が爲に設けられし罟、不法者の網より我を護り給え。

ふけんしゃ おのれ あみ かか ただわれ す え  
不虔者は己の網に罹り、唯我は過ぐるを得ん。

### 【 第 1 4 1 聖詠 】

わ こえ もつ しゅ よ わ こえ もつ しゅ いの わ いのり そのまえ そそ わ うれい  
我が聲を以て主に呼び、我が聲を以て主に禱り、我が禱を其前に注ぎ、我が憂

そのまえ あらわ わ たましい うち よわ とき なんぢ われ みち し わ ゆ みち  
を其前に顯せり。我が霊の衷に弱りし時、爾は私の途を知れり、我が行く路

おい かれら ひそか わ ため あみ もう われみぎ め そそ ひとり われ みと  
に於て、彼等は竊に我が爲に網を設けたり。我右に目を注ぐに、一人も我を認む

もの われ のが ところ わ たましい かえりみ もの しゅ われなんぢ よ  
る者なし、我に遁るる所なく、我が霊を顧る者なし。主よ、我爾に呼びて

い なんぢ われ かくれが い もの ち おい われ ぶん わ よ き たま  
云えり、爾は私の避所なり、生ける者の地に於いて私の分なり。我が呼ぶを聴き給

われはなはだよわ われ はくがい もの すく たま かれら われ つよ  
え、我甚弱りたればなり、我を迫害する者より救い給え、彼等は我より強けれ

ばなり。

わ たましい ひとや ひ いだ われ なんぢ な さんえい たま  
⑩我が霊を獄より引き出して、我に爾の名を讚榮せしめ給え。

けいてい にくたい ものいみ たましい ものいみ およそ ふぎ むすぼれ と きよう  
兄弟よ、肉體にて齋し、霊にても齋せん。凡の不義の結を解き、強

はく わな た およそ ふせい かきつけ さ う もの かに あた むしゆく もの いえ  
迫の縞を斷ち、凡の不正なる書券を裂き、飢うる者に糧を與え、無宿の者を家に

い かん かん おおい あわれみ え ため  
入れん、ハリストス神より大なる憐を得ん爲なり。

なんぢおん われ たま とき ぎじん われ めぐ  
⑨爾恩を我に賜わん時、義人は我を環らん。

けいてい にくたい ものいみ たましい ものいみ およそ ふぎ むすぼれ と きよう  
兄弟よ、肉體にて齋し、霊にても齋せん。凡の不義の結を解き、強

はく わな た およそ ふせい かきつけ さ う もの かに あた むしゆく もの いえ  
迫の縞を斷ち、凡の不正なる書券を裂き、飢うる者に糧を與え、無宿の者を家に

い かん かん おおい あわれみ え ため  
入れん、ハリストス神より大なる憐を得ん爲なり。

しゅ われふか ところ なんぢ よ しゅ わ こえ き たま  
⑧主よ、我深き處より爾に呼ぶ。主よ、我が聲を聴き給え、

いか とく いか ほまれ これ せいしや き けだしかれら なんぢてん かたぶ くだ  
如何なる徳、如何なる譽も、之を聖者に歸すべし。蓋彼等は爾天を傾けて降

もの ため おのれ くび つるぎ した かたぶ なんぢおのれ つく ぼく かたち う もの  
りし者の爲に己の首を劍の下に傾け、爾己を罄して僕の形を受けし者の

ため そのち なが なんぢ へりくだり なら し いた くだ かみ かれら きとう よ  
爲に其血を流し爾の謙卑に效いて、死に至るまで降り。神よ、彼等の祈禱に因

りて、爾が恵の多きを以て我等を憐み給え。

ねが なんぢ みみ わ いのり こえ き い  
⑦願わくは爾の耳は我が禱の聲を聴き納れん。

かみ じつけんしや しとら じつ むけい ひ なんぢら ひか いなづま ごと  
神の實見者たる使徒等よ、實に無形の日たるイイススは爾等を光れる電の若

く、全世界に遣して、爾等の神聖なる傳教の光明にて誘惑の暗を退け、無

ち くらやみ ふか かこ もの たら われら こうしょう おおい あわれみ くだ  
知の幽暗に深く圍まれたる者を照せり。我等にも光照と大なる憐とを降さん

ことを彼に祈り給え。

しゆ も なんぢふほう ただ しゆ だれ よ た しか なんぢ ゆるし ひと  
⑥主よ、若し爾不法を糺さば、主よ、孰か能く立たん。然れども爾に赦あり、人

の爾の前に敬まん爲なり。

イリヤは 齋に照され、諸徳に因りて神聖なる車に登りて、天の高きに擧れり。

わ けんひ たましい かれ なら およそ あくしん そねみ あらそい はかな いつらく せい  
吾が謙卑の靈よ、彼に效いて、凡の惡心と、猜忌と、争闘と、儂き逸樂とを制

するを以て 齋と爲せ、ゲエンナの永遠なる甚しき苦惱を免れて、ハリストスに呼

ばん爲なり、主よ、光榮は爾に歸す。

われしゆ のぞ わ たましいしゆ のぞ われかれ ことば たの  
⑤我主を望み、我が靈主を望み、我彼の言を恃む。

神聖なる使徒等、世界の爲に至りて熱心なる祈禱者、正教の者の守護者よ、我

等爾最尊き者に求む、ハリストス我等の神の前に勇敢なる力を有ちて、我等の

爲に祈り給え、我等が齋の好き期を安らかに送りて、一性なる三者の恩寵を受

けん爲なり。尊榮なる大傳道師よ、我等の靈の爲に祈り給え。

わ たましいしゆ ま ばんにん あさ ま ばんにん あさ ま はなはだ  
④我が靈主を待つこと、番人の旦を待ち、番人の旦を待つより甚し。

われふとう もの へび か きず いき ししや たお ふ しふく  
我不當の者は蛇に噛まれ、傷つけられて、氣息なき死者として仆されて伏す。至福な

せいせいしゃ なんぢ ちから きとう もつ すみやか われ おこ たま わ なんぢ すみやか き  
る成聖者よ、爾の力ある祈禱を以て速に我を興し給え、我が爾の速に聽

おんちょう さんえい ため  
く恩寵を讚榮せん爲なり。。

ねが しゆ たの けだしあわれみ しゆ おおい あがない かれ  
③願わくはイスライリは主を恃まん、蓋憐は主にあり、大なる贖も彼にあり、

かれ そのことごと ふほう あがな  
彼はイスライリを其悉くの不法より贖わん。

われふとう もの へび か きず いき ししや たお ふ しふく  
我不當の者は蛇に噛まれ、傷つけられて、氣息なき死者として仆されて伏す。至福な

せいせいしゃ なんぢ ちから きとう もつ すみやか われ おこ たま わ なんぢ すみやか き  
る成聖者よ、爾の力ある祈禱を以て速に我を興し給え、我が爾の速に聽

おんちょう さんえい ため  
く恩寵を讚榮せん爲なり。。

ばんみん しゆ ほ あ ばんぞく かれ あが ほ  
②萬民よ、主を讚め揚げよ、萬族よ、彼を崇め讚めよ、

きけつ もの わ たましい あ おもい くら ねむ み われ とら つと  
詭譎の者は我が靈が悪しき思に味まされて眠れるを見て、我を捕えんことを務

や かみ きとう よ われ なた すく たま  
めて息めず、神よ、ニコライの祈禱に由りて我を宥めて救い給え。

けだしかれ われら ほどこ あわれみ おおい しゆ しんじつ なが そんな  
①蓋彼が我等に施す憐は大なり、主の眞實は永く存す。

しふく なんぢ われらしゆう ため おおい すくい あらわ なんぢ しょぼく およそ  
至福なるニコライよ、爾は我等衆の爲に大なる救と顯れたり、爾の諸僕を凡の

きなん かんなん ゆうわく しょびょう こうげきおよ み しょてき すく たま  
危難、患難、誘惑、諸病、攻撃及び見えざる諸敵より救い給えばなり。

【 生神女讚詞 第3調 】

こうえいはちちとことせいしんにきす、いまでも  
光 榮 父 子 聖 神 歸 今  
いつもよよに、アミン。  
何時 世 世  
いさぎよきものよ、なんぢがきせきのちか  
潔 者 爾 奇 跡 の 力  
らはおおいなり、けだしなんぢはかんなん  
大 蓋 爾 患 難

よ り た 助 す け 、 し よ り す く い 、 ま 待  
 た ざ る わ ざ わ い よ り の が れ し め 、 う れ い  
 禍 脱 憂  
 を と き 、 ひ と び と の ざ い か を の ぞ き  
 解 人 人 罪 過 除  
 た も う 。  
 給

【 聖入 】

司祭) <sup>えいち</sup> 睿智、<sup>つし</sup> 肅 <sup>た</sup> みて立て、

【 聖ソフロニイの祝文 】

せ い に し て ふ く た る じ ょ う せ い な る て ん の ち ち の  
 聖 福 常 生 天 父  
 せ い な る こ う え い の お だ や か な る ひ か り イ イ  
 聖 光 榮 穩 光  
 ス ス ハ リ ス ト ス よ 、 わ れ ら ひ の い り に い た り く  
 我 等 日 入 至 暮  
 れ の ひ か り を み て 、 か み ち ち と こ と せ い し ん  
 光 見 神 父 子 聖 神  
 を う と う 。 い の ち を た も う か み の こ 子  
 歌 生 命 賜 神 子  
 よ 、 な ん ち は い つ も け い け ん の こ え に て う た わ  
 爾 何 時 敬 虔 聲 歌

る べ し 、 ゆ え に せ か い は なん ぢ を あ が め  
 故 世 界 爾 崇  
 ほ む 。  
 讚

【 第一の提綱 】

司祭) <sup>つつし</sup> 謹 <sup>き</sup> みて聴くべし、<sup>しゅうじん</sup> 衆 <sup>へいあん</sup> 人に平安、<sup>えいち</sup> 睿 <sup>つつし</sup> 智、<sup>き</sup> 謹 <sup>き</sup> みて聴くべし。

誦經) <sup>だいご</sup> プロキメン、<sup>しらべ</sup> 第五の <sup>しゅ</sup> 調、<sup>なんぢ</sup> 主よ、<sup>われら</sup> 爾 <sup>たも</sup> は我等を保ち、<sup>われら</sup> 我等 <sup>まも</sup> を護りて、<sup>こ</sup> 斯 <sup>よ</sup> の世より <sup>えい</sup> 永

<sup>えん</sup> 遠 <sup>いた</sup> に至らん、

しゅよ、なんぢはわれらをたもち、われらをまも  
 主 爾 我 等 保 我 等 護  
 りて、このよよりえいえんにい  
 斯 世 永 遠 至  
 たらん。

誦經) <sup>しゅ</sup> 主よ、<sup>われ</sup> 我 <sup>すく</sup> を救い <sup>たま</sup> 給え、<sup>けだしぎじん</sup> 蓋 <sup>た</sup> 義人は絶えたり、

しゅよ、なんぢはわれらをたもち、われらをまも  
 主 爾 我 等 保 我 等 護  
 りて、このよよりえいえんにい  
 斯 世 永 遠 至  
 たらん。

誦經) <sup>しゅ</sup> 主よ、<sup>なんぢ</sup> 爾 <sup>われら</sup> は我等を保ち、<sup>われら</sup> 我等 <sup>まも</sup> を護りて、



司祭) <sup>えいち</sup> 睿智、

誦經) <sup>そうせいき よみ</sup> 創世記の讀、

司祭) <sup>つつし き</sup> 謹みて聽くべし、

【 創世記 1章24節～2章3節 】

誦經) <sup>かみい</sup> 神曰えり、<sup>ち いきもの</sup> 地は生物を<sup>そのるい</sup> 其類に<sup>したが</sup> 従いて、<sup>かちく</sup> 家畜と、<sup>はうもの</sup> 昆虫と、<sup>ち けもの</sup> 地の獸とを<sup>そのるい</sup> 其類に<sup>したが</sup> 従いて産すべし。即、<sup>すなわち</sup> 斯く成れり。神は<sup>かみ</sup> 地の<sup>ち けもの</sup> 獸を<sup>そのるい</sup> 其類に<sup>したが</sup> 従いて、<sup>かちく</sup> 家畜を<sup>そのるい</sup> 其類に<sup>したが</sup> 従いて、<sup>ち もろもろ</sup> 地の<sup>はうもの</sup> 諸の<sup>そのるい</sup> 昆虫を<sup>したが</sup> 其類に<sup>つく</sup> 従いて造れり。神之<sup>かみこれ</sup> を<sup>み よし</sup> 觀て善とせり。神曰えり、<sup>かみい</sup> 人<sup>ひと</sup> を<sup>われら</sup> 我等の<sup>ぞう</sup> 像と<sup>われら</sup> 我等の<sup>しょう</sup> 肖とに<sup>したが</sup> 従いて造るべし。彼は<sup>つか</sup> 海の<sup>かれ</sup> 魚と、<sup>うみ</sup> 天空の<sup>うお</sup> 鳥と、<sup>そら</sup> 獸と、<sup>とり</sup> 家<sup>けもの</sup> 畜と、<sup>か</sup> 全地と、<sup>ち</sup> 地に<sup>ぜんち</sup> 匍う<sup>ち</sup> 所の<sup>は</sup> 諸の<sup>ところ</sup> 昆虫とを<sup>もろもろ</sup> 宰<sup>つかさど</sup> るべし。神乃<sup>かみ</sup> 己の<sup>すなわち</sup> 像に<sup>おのれ</sup> 従い<sup>ぞう</sup> て人<sup>したが</sup> を造り、神の<sup>かみ</sup> 像に<sup>これ</sup> 従いて之<sup>つく</sup> を造れり。之を<sup>これ</sup> 男女に<sup>なんによ</sup> 造れり。神<sup>かみ</sup> 彼等<sup>かれら</sup> を<sup>しゆく</sup> 祝して曰えり、<sup>う</sup> 生めよ、<sup>ふ</sup> 殖えよ、<sup>ち</sup> 地に<sup>み</sup> 充てよ、<sup>これ</sup> 之<sup>おさ</sup> を<sup>また</sup> 治めよ、<sup>うみ</sup> 又<sup>うお</sup> 海の<sup>けもの</sup> 魚と、<sup>そら</sup> 獸と、<sup>とり</sup> 天空の<sup>もろもろ</sup> 鳥と、<sup>もろもろ</sup> 諸の家畜と、<sup>かちく</sup> 全地と、<sup>ち</sup> 地に<sup>ぜんち</sup> 匍う<sup>ち</sup> 所の<sup>は</sup> 諸の<sup>ところ</sup> 昆虫とを<sup>もろもろ</sup> 宰<sup>つかさど</sup> れ。神又曰えり。視よ、<sup>かみ</sup> 我<sup>また</sup> 爾<sup>み</sup> 等<sup>われ</sup> に、<sup>ぜんち</sup> 全地<sup>おもて</sup> の<sup>あ</sup> 面<sup>たね</sup> に<sup>ま</sup> 在<sup>ことごと</sup> る<sup>くさ</sup> 種<sup>およ</sup> を<sup>ま</sup> 蒔<sup>たね</sup> く<sup>いだ</sup> 悉<sup>み</sup> くの<sup>むす</sup> 草<sup>ところ</sup> 、<sup>ところ</sup> 及び<sup>ところ</sup> 、<sup>ことごと</sup> 蒔<sup>き</sup> く<sup>あた</sup> べき<sup>こ</sup> 核<sup>なんぢら</sup> を<sup>かて</sup> 懐<sup>な</sup> く<sup>また</sup> 實<sup>ち</sup> を<sup>すべ</sup> 結<sup>けもの</sup> ぶ<sup>そら</sup> 所の<sup>すべ</sup> 鳥<sup>とり</sup> 、<sup>とり</sup> 悉<sup>ところ</sup> くの<sup>ところ</sup> 樹<sup>ところ</sup> を<sup>ところ</sup> 與<sup>ところ</sup> へたり。此れ<sup>ところ</sup> 爾<sup>ところ</sup> 等<sup>ところ</sup> の<sup>ところ</sup> 糧<sup>ところ</sup> と<sup>ところ</sup> 爲<sup>ところ</sup> らん、又<sup>ところ</sup> 地の<sup>ところ</sup> 凡<sup>ところ</sup> ての<sup>ところ</sup> 獸<sup>ところ</sup> 、<sup>ところ</sup> 天空<sup>ところ</sup> の<sup>ところ</sup> 凡<sup>ところ</sup> ての<sup>ところ</sup> 鳥<sup>ところ</sup> 、<sup>ところ</sup> 及び<sup>ところ</sup> 地<sup>ところ</sup> を<sup>ところ</sup> 匍<sup>ところ</sup> う<sup>ところ</sup> 所の<sup>ところ</sup> 凡<sup>ところ</sup> ての<sup>ところ</sup> 昆虫<sup>ところ</sup> 、<sup>ところ</sup> 凡<sup>ところ</sup> そ<sup>ところ</sup> 生命<sup>ところ</sup> ある<sup>ところ</sup> 者<sup>ところ</sup> には、<sup>ところ</sup> 我<sup>ところ</sup> 食<sup>ところ</sup> として<sup>ところ</sup> 凡<sup>ところ</sup> ての<sup>ところ</sup> 青<sup>ところ</sup> き<sup>ところ</sup> 草<sup>ところ</sup> を<sup>ところ</sup> 與<sup>ところ</sup> へたり。即<sup>ところ</sup> 斯<sup>ところ</sup> く<sup>ところ</sup> 成<sup>ところ</sup> れり。神<sup>ところ</sup> は<sup>ところ</sup> 其<sup>ところ</sup> 造<sup>ところ</sup> りし<sup>ところ</sup> 悉<sup>ところ</sup> くの<sup>ところ</sup> 物<sup>ところ</sup> を<sup>ところ</sup> 觀<sup>ところ</sup> て、<sup>ところ</sup> 甚<sup>ところ</sup> 善<sup>ところ</sup> すと<sup>ところ</sup> せり。夕<sup>ところ</sup> あり<sup>ところ</sup> 朝<sup>ところ</sup> あり、<sup>ところ</sup> 是<sup>ところ</sup> れ<sup>ところ</sup> 第<sup>ところ</sup> 六<sup>ところ</sup> 日<sup>ところ</sup> なり。斯<sup>ところ</sup> く<sup>ところ</sup> 天<sup>ところ</sup> 地<sup>ところ</sup> 及<sup>ところ</sup> び<sup>ところ</sup> 其<sup>ところ</sup> 悉<sup>ところ</sup> くの<sup>ところ</sup> 装<sup>ところ</sup> 飾<sup>ところ</sup> は<sup>ところ</sup> 成<sup>ところ</sup> れり。神<sup>ところ</sup> は<sup>ところ</sup> 第<sup>ところ</sup> 六<sup>ところ</sup> 日<sup>ところ</sup> に<sup>ところ</sup> 其<sup>ところ</sup> 造<sup>ところ</sup> り<sup>ところ</sup> たる<sup>ところ</sup> 工<sup>ところ</sup> を<sup>ところ</sup> 竣<sup>ところ</sup> え、<sup>ところ</sup> 第<sup>ところ</sup> 七<sup>ところ</sup> 日<sup>ところ</sup> に<sup>ところ</sup> 其<sup>ところ</sup> 造<sup>ところ</sup> り<sup>ところ</sup> たる<sup>ところ</sup> 悉<sup>ところ</sup> くの<sup>ところ</sup> 工<sup>ところ</sup> より<sup>ところ</sup> 息<sup>ところ</sup> めり。神<sup>ところ</sup> は<sup>ところ</sup> 第<sup>ところ</sup> 七<sup>ところ</sup> 日<sup>ところ</sup> を<sup>ところ</sup> 祝<sup>ところ</sup> し<sup>ところ</sup> て、<sup>ところ</sup> 之<sup>ところ</sup> を<sup>ところ</sup> 聖<sup>ところ</sup> に<sup>ところ</sup> せり、<sup>ところ</sup> 蓋<sup>ところ</sup> 斯<sup>ところ</sup> の<sup>ところ</sup> 日<sup>ところ</sup> に<sup>ところ</sup> 於<sup>ところ</sup> て<sup>ところ</sup> 神<sup>ところ</sup> は<sup>ところ</sup> 造<sup>ところ</sup> り<sup>ところ</sup> たる<sup>ところ</sup> 其<sup>ところ</sup> 悉<sup>ところ</sup> くの<sup>ところ</sup> 工<sup>ところ</sup> より<sup>ところ</sup> 息<sup>ところ</sup> めり。

【 第二の<sup>プロキメン</sup> 提綱 】

司祭) <sup>つつし</sup> 謹 <sup>き</sup> みて聴くべし、

誦經) <sup>だいろく</sup> プロキメン、<sup>しらべ</sup> 第六の調、<sup>しゅわ</sup> 主我が<sup>かみ</sup> 神よ、<sup>かえり</sup> 顧 <sup>われ</sup> みて <sup>き</sup> 我に <sup>たま</sup> 聴き給え、



しゅわが かみよ、かえりみて われに ききた 給。  
主我 神 顧 我 聴 給  
ま え。

誦經) <sup>しゅ</sup> 主よ、<sup>われ</sup> 我を <sup>まつた</sup> 全く <sup>わす</sup> 忘ること <sup>いづれ</sup> 何の <sup>とき</sup> 時に <sup>いた</sup> 至るか、<sup>なんぢ</sup> 爾の <sup>おもて</sup> 面を <sup>われ</sup> 我に <sup>かく</sup> 隠すこと <sup>いづれ</sup> 何の <sup>とき</sup> 時に <sup>いた</sup> 至るか、



しゅわが かみよ、かえりみて われに ききた 給。  
主我 神 顧 我 聴 給  
ま え。

誦經) <sup>しゅわ</sup> 主我が <sup>かみ</sup> 神よ、



かえりみて われに ききた 給。  
顧 我 聴 給  
ま え。

【 祝福 】

司祭) <sup>えいち</sup> 睿智、<sup>つつし</sup> 肅 <sup>た</sup> みて立て、<sup>ひかり</sup> ハリストスの <sup>しゅうじん</sup> 光は <sup>てら</sup> 衆人を照らす。

誦經) <sup>しんげん</sup> 箴言の <sup>よみ</sup> 讀、

司祭) <sup>つつし</sup> 謹 <sup>き</sup> みて聴くべし、

【 箴言 2章1~22節 】

誦經) <sup>わ</sup> 我が <sup>こ</sup> 子よ、<sup>なんぢ</sup> 爾 <sup>ことば</sup> 若し我が <sup>い</sup> 言を <sup>わ</sup> 納れ、<sup>いましめ</sup> 我が <sup>おのれ</sup> 誠命を <sup>うち</sup> 己の <sup>おさ</sup> 表に <sup>か</sup> 藏め、<sup>なんぢ</sup> 斯くして <sup>みみ</sup> 爾の <sup>ちえ</sup> 耳 <sup>かたが</sup> を <sup>なんぢ</sup> 智慧に <sup>こころ</sup> 傾け、<sup>さとり</sup> 爾の <sup>む</sup> 心を <sup>も</sup> 聰明に <sup>ちしき</sup> 向け、<sup>よ</sup> 若し <sup>さとり</sup> 知識を <sup>む</sup> 呼び、<sup>こえ</sup> 聰明に <sup>あ</sup> 向かいて <sup>あ</sup> 聲を揚



げ、若し銀の如く之を求め、寶の如く之を尋ねば、則爾主を畏るる寅畏を曉

り、神を知る知識を獲ん。蓋主は智慧を與え、知識と聰明とは其口より出ず、彼は

義人の爲に救を備う、彼は直く行く者の爲に盾なり、彼は公義の途を保ち、其

聖者の諸途を守る。是くの如くして爾は公義と公判と正直と一切の善き道

とを曉らん。智慧爾の心に入り、知識爾の靈に娛しからん時は、則思慮

は爾を守り、聰明は爾を保たん、是れ爾を惡しき途より、虚偽を言う人より救

い、直き途を離れて幽暗の路を行く者より、惡を行うを樂しみ、惡者の邪修を

喜ぶ者より、其途の曲り、其徑に迷う者より救わんが爲、爾を淫婦より、言

を以て諂う婦より、其少き時の教導者を棄てて、神の約を忘れたる者より救

わんが爲なり、蓋彼の家は死に引き、其徑は死亡者に趣く、彼に入る者は皆

かえ歸らず、亦生命の途に上らず。故に爾善人の途を行き、義人の諸途に循え、蓋

義人は地に居るを得、無玷の者は此れに留まらん、然れども惡人は地より滅ぼさ

れ、悖れる者は之より根絶されん。

司祭) 爾に平安、睿智、願わくは我が禱は香爐の香の如く爾が顔の前に登り、

我が手を擧ぐるは暮の祭の如く納れられん。

※ 願わくは我が禱は、、、へ